君がいたから＃番外編＃

レオ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君がいたから#番外編#

【Ｎコード】
Ｎ６３２６Ｙ

【作者名】
レオ

【あらすじ】
季節も１２月。
腐れ縁の２人とカフェでまったり。
でも、そのまったりの中にほんわかと幸せがいっぱいいっぱいになった。

（前書き）

君がいたからの番外編です♪
１２月設定なので、雄成たちが付き合ってからのお話なので
前が分からない方は、前の連載小説の「君がいたから」をご覧くだ
さいませ！

「ごっめん～寝坊したぁ～」
丸くて色白のぽっちゃりしてるけど可愛い顔を
満面の笑みにして、走ってくるこいつは細田毬(ほそだまり)。
絶対に反省して無いだろてめぇ、って顔をしてるこんな奴だけど
なぜか憎めない。
ちなみに、学校は違うが、腐れ縁的に仲が良いのだ。（色々と。）

「遅い！時間にはちゃんとしなさいってこの前言ったでしょ？！」
いきなり叱ってるこの美少女は七井未奈(なないみな)。
モデル体型で毬とは違う可愛いさを持っている未奈は
だまっていればそうなるけど、しゃべるとすげぇ毒舌だったりする。
ちなみに、未奈も学校は違うが、腐れ縁的に仲が良いのだ。（色々と。）

「だってぇ～」
「言い訳するなっ馬鹿毬」
「馬鹿とはなんだ！馬鹿とは！成績2位キープ中だもん！」
さすが・・・毬・・・。2位とは、天才だこいつ。
「はぁ？2位って、あんたあたしを嘗めてる？
あたしは、1位ですけども？」
毬が「そうきたかぁっ」と指を鳴らした。
「ちょっとそこの馬鹿の反対の生物よ。
あんたら、あたしの成績をわかってソンナ話をしているのか？」
「あぁ、ごめん♪美結ちゃんは馬鹿だったね？」
「うっせ、精神的にはお前が一番馬鹿だ」
「毬はちょっと破壊されてるだけであってそんなことは・・・！」
「はいはい、馬鹿はだまろうね？美結ちゃん、いこっか～☆

こんなの放ってお・い・て♪」
うわぁ。何気に毒づきまくりだな。（笑）

あたしたちは久しぶりにあつまったもんだから
とりあえず、カフェでゆっくり話そうっかって事になったんだよね。

カフェについて、中の席を取る。
まぁ、今12月だし？外とか死んじゃうよ
（ちなみに今日は25日）
「はぁ～・・・あったかぁい」
毬が白い手袋を取って伸びをする。
「あんたの心は年がら年中ひえてんもんね？」
未奈がコートを脱ぎながらニヤリと笑った
「うわぁ～ひどいなぁ、未奈」
こんな会話を聞きつつメニューを開く。
ブラックコーヒーでいっかな
「飲み物、どうするの？」
一応聞いてみるけど、別に聞かなくてもいいような気がする。
呼べば適当に言うだろーし
「それじゃぁ、毬はココアで！」
「あたしはミルクティーで」
「りょーかい＾＾すいませーん」

注文をし、毬たちのほうを向く
すると、いきなり二人ともニヤリ・・・と笑って
あたしを目線でがっしり捕らえる
「な、なに？」
スゴーく圧迫されてるのは気のせいじゃぁないわよね？うん、だよね？
「雄成とはうまくいってるのかしらぁね？と思ってぇ」

毬がわざとらしく聞く。
あたしは雄成と言う名前を聞くだけで、頬が赤くなるのがわかった。

あたしと雄成は現在恋人同士。
幼馴染で、とても仲が良い上に家が隣同士の雄成に
あたしはいつしか惹かれていた。
日中変態先生に襲われて、やっと気づいた・・・って奴。
まぁ、襲われちゃってんだけどねぇ・・・。

「まぁまぁ・・・」
まぁまぁ、ってか・・・
いや、決してうぬぼれているわけではないが。。。
ないけども・・・ラブラブ・・・だと思う。
「まぁまぁじゃぁなくてさ、ちゃんとした経過を！」
「えーっと・・・毎日一回はあってる・・・てか会うし・・・
後・・・・」
「「後？」」
毬と未奈の期待高だがな声がハモル。
「・・・・雄成のとこ・・・ってね、お金持ちでしょう？
でね、雄成がこの前ね、なんか「家買ったから」とか言ってきて
で、なんかよくわかんなくてっっ・・・」
「美、美結ちゃん、落ち着いてっ？？
って、えぇ？！それって、同居しよってことでしょ！？
てかそれって＝すると・・・！？」
「あぁ～！やめて！その先言わないでぇっ！！」
あたしは耳をふさいだ。
だって、聞いたら・・・聞いたら・・・
「なんで？？幸せな事じゃない？」
きい・・・たら・・・
「幸せすぎて怖くなる・・・から」

「「は。？」」
これまたはもる。
「は。」の「。」までもはもった。
「ちょ、美結ちゃん？！なんでそこで怖いの！？
幸せなんだからいいじゃん！」
「だって・・・幸せすぎたら・・・幸せが壊れた時
怖いじゃん・・・？」
素直に言ってみると、二人は「はぁ・・・・」となっがーいため息
をついた
「え・・・なんかあたし呆れられるようなことといった？！」
「「おもいっきしな」」
「えっ？！どこよ？！」
「まぁ・・・別にいいんじゃない？確かに、幸せが壊れてしまうのは
一番恐怖よね・・・ま、こいつ（毬をさす）に関しては？
フェＯＯ－テＯＯやバＯとテＯＯと召ＯＯとかの色々をこう妄想し
て・・・」
「あぁ！うるさい！未奈もそんなもんだろ！」
「いーや、あたしは実際に彼氏いるし？あんたと違うし？」
「え？！未奈彼氏いるの！？」
あたしは思いっきり目を見開く
「えぇ、まぁね？」
清まし顔で言うものの、嬉しそうだ。
「え。てかさ、毬は放っておくとしてさ、その彼氏とデート・・・
とかないの？
今日、クリスマスだし・・・。」
「それを言うなら、美結ちゃんもでしょう？
雄成と約束してるんじゃないの？」
「えっと・・・ね・・・」
「美結。」
続きを言おうとすると聞き覚えのある

クールで少し素っ気無いけど
愛おしい声が聞こえた。
「雄成っ」
あたしは雄成に抱きつく。
（ここのカフェ、裏カフェって言って、全然人がいません。笑）
雄成はあたしの髪を優しく撫ぜる。
あたしは雄成から離れて横に着く。
「雄成久しぶりっ」
毬がにこやかに言う。
「おぉおぉ、お久しぶりねぇ。クソキツネ。」
未奈はすっごい毒づきぶりだ
「久しぶりだな？意外と。同窓会ぶり？」
「そうそう！」
「そーいえばそーねぇ。」
毬は久しぶりで楽しそうだし、
未奈は未奈で結構楽しそう。
「あぁ、未奈。そこで裕斗（ゆうと）が待ってたけど？」
「え？！うっそ！？」
裕斗・・？って
「えぇ？！ま、まさか・・・！」
「裕斗が彼氏？！」って言う前に本人が着てしまった。
「呼ばれて出てきてっどかーん！って、あれ。なに、この微妙なメンツ」
裕斗がニコニコ、ふらふらとこっちにきた。
「ま・・・まさか・・・。あんなに嫌ってたのに・・・未奈・・・！」
「いや・・・なんか、ちょっとねぇ・・・」
未奈が苦笑いをしながら言う。
「ってか、雄成と美結ってコレですか？！（小指と親指をくっつけてる）

うわっいっがいっ！」
「そう？なんとなくくっ付く感じしてたけど？」
未奈はあたりまえ、みたいな顔で言っている。
「くっ・・・てか、これだと毬は負け犬か？」
雄成が笑いながら言う。
「ほんとにねぇ、馬鹿毬も彼氏作りなさいよ？」
「えー・・・毬の理想なんて・・・」
毬が言おうとすると、裕斗が「おい？外で隼生(はやき)居るぞ？」と
外と中に交互に頭を出しながら言う。
「は？！隼、隼生がぁ？！」
毬がすごい勢いで外に出ると
隼生は呆れた顔で「なんでそんな勢いづいてんのさ」と言った。
「あ・・・いや、その・・・」
珍しく、毬が戸惑う。
あれ、まさかまさかの、あれですか？
同級生同士の再会にくっ付いちゃう系！？
「毬も勝ち組みだな（笑）」
「毬、よかったわね？」
毒舌二人に、冷やかし（？）っぽいのを言われ、毬は照れまくり。

「さぁてと。各コンビ、いいクリスマスにしよね？」
未奈に言われて皆笑いあう。
「それじゃぁね！！」

みんなカフェを出て、各自自分達の目的地の道についた。
（幸いココアなどはきていなかった）

あたしたちは、あたしたちが同居する・・・とか言う家を見に行く。
「ねぇ・・・雄成。」
「なに？」

「あたしたち・・・こんなに幸せでいいのかな・・・？」
「は？別にいいんじゃねーの？」
「なんか・・・怖いよ？あたし」
ちゃんと打ち明けてみた。
すると、雄成は優しく笑って
「大丈夫。怖くなんかねぇよ？俺が、その怖い思いも
全部幸せに変えるから」
そういって、足を止め、あたしの唇にキスをする。
「うん・・・っ」
あたしは雄成の腕にあたしの腕を絡ませて、歩いた。

白いフワフワしたものが、上から降ってきた
「あ・・・雪」
「本当だな」
雄成は見上げながら目を細めて笑っている
あたしも笑っていた。

キレイだな、とか思ってうえをずっと見ていると
耳元で甘い・・・甘い囁きが聞こえた。
「俺と結婚してくれませんか」
そう、本当に甘く・・・甘く・・・
雄成はあたしの方を向いて、小さい小箱をポケットから取り出した。
渡されて、あけるとそこには小さな可愛い・・・指輪がはいっていた。
「・・・っ・・・雄成、ありがとう・・・っ」
あたしは、また、雄成に思いっきり抱きついた

「大好き、雄成」
「知ってるよ」

—END—

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6326y/

君がいたから＃番外編＃

2011年11月19日10時14分発行